

100年ぶりの「うなずき」



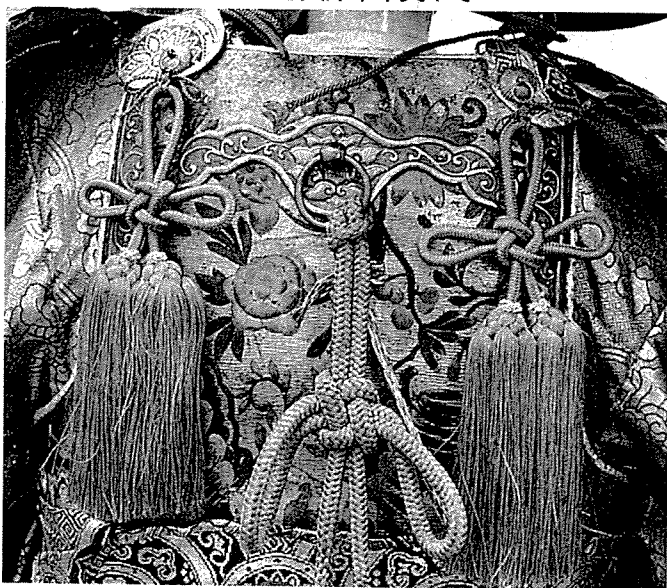
大津祭 孔明祈水山

京田辺・文化創造巧芸 からくり人形修復

3年ぶりに曳山巡行が行われる国の重要無形民俗文化財「大津祭」で、曳山の二つ「孔明祈水山」のからくり人形の修復が完了し、稽古場所の町家に人形が届いた。少なくとも100年は動いていなかったとされる人形の首が動くようになり、からくりの新たな動作に合わせた囃子の稽古にも力が入っている。

【菅健吾】

①少なくとも100年ぶりに首が動くようになり、目配せの動作などができるようになった諸葛孔明（奥）と趙雲のからくり人形②珍しい「金唐革風革紙」が使用された趙雲人形の鑑—いずれも大津市中央1で



孔明祈水山は、古代中国の三国時代の故事に由来し、蜀の軍師・諸葛孔明と將軍・趙雲のからくり人形が乗る。趙雲が鉾で突いた岩から水があふれ出して魏の軍勢を押し流し、孔明が羽扇を上下させ喜ぶ場面を描く。これまでは羽扇と鉾を持つ手の動きで故事を表現してきた。今回の修復によって、両人形の首が動くようになり、目配せやうなずく仕草が可能となり、表現の幅が広がった。

8日、宵宮でお披露目

町内には「かつては動いていた」という言い伝えがあったが、誰も実際に動いていたところを見たことはなく、大津祭のからくり人形の修復調査をする岐阜市の工学博士・石樽康彦さん（43）が調査。頭部を動かせる機構は、くいが打たれて動かなくなっていたが、過去には動作していた痕跡が見つかった。

文化財の調査や保存修復を行う「文化創造巧芸」（京田辺市）が修復を担当し、首とつながる芯棒を人形の下方まで継ぎ足す木材をつけ、首を回したり、上下にうなずいたりする動作を可能とした。不自然な動きをしないようにストッパーを付けて可動域を制限し、趙雲人形は首の動きでかぶりがずれないようにシリコンの緩衝剤を挟んだ。また衣装の修復の過程で、金唐革（きんたうかく）に欧州の高級装飾革「金唐革」に似せた「金唐革風革紙」という珍しい和紙が使われていることも判明した。

孔明祈水山の前曳山責任者の橋本明さん（74）は「70年近く曳山に関わっているが、首が動いたのを見たのは初めてで感激した。祭りが楽しみだ」と話した。

からくりの動きに合わせた囃子の稽古にも熱が入る。9月25日の人形搬入直後は笛や太鼓に合わせて、からくりの動作を確認していた。孔明祈水山の囃子方責任者、本原功二郎さん（39）は「これまでは動きが寂しいと思うこともあったので、期待は大きい。動きのタイミングを合わせられるよう稽古に励みたい。首の動きと2人のやりとり注目してほしい」と話した。

2体のからくり人形は10月8日の宵宮にお披露目される。趙雲人形は頭部が重く、首を動かすために使われているクシラのひげへの負担を考慮し、うなずく動作は町内と天孫神社前の2回をみの披露とする予定。